

災厄の時代における生きることへの愛

マリールテレーズ・ブロンドー

【要旨】

ペスト流行下のオランは、無機的・鉱物的な死の世界である。海水浴のエピソードは、自然とのまばゆいばかりのコミュニケーション（一体化）の瞬間であり、世界に生きることへの愛を再導入する。この世界はまた、女性たちのいない、それゆえ愛のない世界でもある。しかし、愛することへの熱望が、後悔、欲望、あるいは希望という形で残り続けている。リユーにとっての母の愛、グランの小説の冒頭に描かれる馬に乗る女性は、病と死を癒やす薬のようなものとして、厄災に抵抗し、自分の仕事をしっかりと遂行し続けることを可能にする。

【プロフィール】マリールテレーズ・ブロンドー：文学の教授資格を持ち、カミュ研究会の副会長を務める。また、同研究会発行の雑誌 *Présence d'Albert Camus* の編集委員会の中心メンバーでもある。プレイヤード版のカミュ新全集第2巻（『ペスト』）の編集に加わり、フランスやその他の国々におけるシンポジウムに参加。さまざまな雑誌でカミュに関する論文を発表している。近年の主な発表と論文は、次のとおりである。《L'insoutenable vertige du sacré》「聖なるものによる耐え難いめまろし」(Albert Camus et les vertiges du sacré,

PUR 2016所収) 《Sisyphé et Prométhée sous le soleil de la peste, à l'ombre du Minotaure》「ペストの太陽の下、ミノタウロスの影の下でのシシフィスとプロメテウス」(2017年10月、フェノスマイリスにて発表) 《Don Juan ou le démon de l'immanence》「エン・ジマンもあるじは内在性の化身」(*Présence d'Albert Camus* 2017所収) 《Le voyage odysseéen de Camus : retour aux origines?》「カミュのオデュッセイア的な旅程：源泉への回帰」(2017年、シノルカ島における *Trobades Albert Camus* のシンポジウムにおける発表) 《De l'insignifiance : les êtres mécaniques dans *La Peste*》「無意味さについて：『ペスト』における機械的な人々」(*Études camusiennes* n. 14 2016所収) 《La «duplicité profonde» de Clamence : la confession perverse comme stratégie érotique》「クラメンスの「深遠な」重性」：エロティックな戦略としての悪意ある告白」(*Les Lettres Romanes* 73 2016所収) 《Camus/Bruckberger. Destins croisés》「カミュ／ブリュックベルグの交差する運命」(*Lettres Modernes*, série Albert Camus n. 24所収) 《Camus/Grenier : un ami `capital》「カミュ／グルニエ：「極めて重要な」友人」(*Epistolaire* n. 46 2020所収) 《La Peste : des rats aux mouches》(『ペスト』：ネズミからハエへ)(2021年、Le Chambon-sur-Lignon における シンポジウム *Rencontres Albert Camus* における発表)。

